

### 「ケルト」という言葉

Tolkien と言えば、古英語・中英語・ゲルマン諸語のフィロロジストであるが、彼はオックスフォード大学におけるケルト学の講演シリーズ O'Donnell Lectures の初回（1955 年）に登壇し“English and Welsh”というタイトルで講演を行っている<sup>1</sup>。この“English and Welsh”で Tolkien は“Celtic”という言葉で「ケルト諸語の」という言語学的な用語として使う必要、そして“Celtic”という包括概念が近代に創出されたものであることに注意を促し、それを「人種」へと拡大しステレオタイプ化することの誤謬を指摘している。

「ケルト」という言葉は、1990 年代以降考古学者による「ケルト懐疑」の動きを受け、使用に慎重が期されるようになった<sup>2</sup>。しかしケルト語・ケルト語文学研究者の間ではそれ以前から、「ケルト・ケルティック」に関する一般に流布したステレオタイプに対して、例えば Sims-Williams は 1980 年代から<sup>3</sup>、より早くは 1951 年の Kenneth Jackson に見られるように抗議の声が上げられている。1955 年の Tolkien の“English and Welsh”におけるケルティシズム<sup>4</sup>批判は、こうしたケルト学研究者と共通の学問的認識を反映した姿勢なのである。Jackson はケルト語話者に関するロマンチックな偏見の根源を Macpherson の『オシアン』に辿り、W. B. Yeats ら「ケルト復興」のムーブメントが生み出した神秘性を強調するステレオタイプを「甚だしい虚説」と批判し、Matthew Arnold の「ケルトの魔法」(Celtic Magic)というフレーズを「謬見から生まれ、更なる謬見を招いている」と弾劾している<sup>5</sup>。Tolkien もケルティシズムの元凶と見なされている Arnold の打ち出した気まぐれで詩的な「ケルト」と質実剛健で現実的な「サクソン/チュートン」という二項対立のステレオタイプを揶揄して「ほとんどの神話と違って、この神話には全く価値がない」と断じている<sup>6</sup>。「ケルト」と超自然の世界や神秘・幻想との親和性という刷り込みは、日本においても未だ非常に根強いものである。

### 「妖精」と「ケルト」

超自然的要素を代表する存在である妖精は、「ケルト」との繋がりが濃厚である。中世文学を彩ったロマンス作品に登場する妖精たちが活躍する場として浮上するのが、未だ知られざるものが存在し得る「周縁領域」として位置づけられた、現在で言うところの「ケルト諸語圏」であった。ブルターニュやアイルランドなどのケルト諸語圏は、12 世紀には「不思議」や「未開」のイメージが付与されていた。東方は、古代作家の百科全書や地理書においても驚異の宝庫とされていたが、こうした未知の遠い東方の驚異と類似した驚異がヨーロッパ辺境の地にも存在するとされ、これが西方のケルト諸語圏であった<sup>7</sup>。隣り合わせの辺境であるがゆえに、政治的な思惑も絡み征服すべき「未開・野蛮」という色彩も帯びた。完全に未知な世界に属する奇怪な化け物ではなく、身近な隣り合わせの驚異を体現するのが「妖精」なのだと言えよう。

英語におけるフェアリーという言葉の初出は中英語のブルトン・レ、*Sir Orfeo* である。ブルトン・レはヨーロッパ中世における「驚異」の歴史の中で 12 世紀における一大開花の一端を担い、しばしば妖精に象徴される超自然的要素を持つのが特徴のジャンルである。典拠であるギリシア・ローマ古典のオルペウスの物語と比して *Sir Orfeo* を特徴づけているのは、妖精および妖精の国の存在である。このような中世ロマンスに認められる超自然的要素や異界にまつわるエピソードなどは、中世英文学研究において 19 世紀末以来「ケルト起源」として説明されてきた。*Sir Orfeo* における「ケルト的」要素に初めて注目し、ケルト諸語圏における類話に縦横に言及しつつ、これを作品の起源と結び付けて論じたのは、G. L. Kittridge であったが、1886 年のこの論文ではアイルランドやウェールズの伝承との類似が十把一絡げに「ケルト伝承」起源の例証として指摘されている<sup>8</sup>。しかし「ケルト文学」という概念は、Ernest Renan の『ケルト民族の詩歌』(1854 年)以前には存在しなかったものである。中世ロマンスにおける超自然的要素の起源をケルト語圏における妖精や異界にまつわる類話に求める 19 世紀末以降の研究姿勢は、ケルト諸語の話者に「ケルト人」として統合・一般化されたイメージを付与した Renan や Arnold のケルティシズムの影響を受けたものであると見なされよう。妖精といえば「ケルティック」と同定されるようになったのは、Sims-Williams が the Visionary Celt と呼ぶ「ケルト」に対するこうしたステレオタイプに根ざすところが大きいと思われる。

### Tolkien にとっての Celtic なるもの

Tolkien のエルフは、Yeats が「気高く美しい」とするアイルランドの Tuatha Dé Danann のイメージを踏襲している<sup>9</sup>。しかし Tolkien にとって自身のエルフが「ケルティック」であるとしたら、それはエルフの言語、Sindarin がウェールズ語というケルト語の音韻体系を基に作られているということに尽きよう。ブリテン島において記録に残る最古の言語である British (ブリトン語) の直系の子孫であるウェールズ語は、Tolkien にとって歴史的な観点および審美的観点からかけがえのない存在だった。

Welsh is of this soil, this island, the senior language of the men of Britain; and Welsh is beautiful.<sup>10</sup>

ウェールズ語の音韻がなぜ言語としてもっとも審美的喜び(linguistic aesthetic pleasure)を与えるのか、なぜ特定の言語の音韻に強く心惹かれるのかに関して、Tolkien は非常にユニークな仮説を持っており、このような言語学的思考には個人的なもの、一定のグループに共有されるものがあるが、どちらも個人の言語的故郷(home)の感覚と結び付いていると考えていた<sup>11</sup>。このような個人の生来の言語的嗜好(“inherent linguistic predilections”)<sup>12</sup>を Tolkien は *native language* という概念で説明しようとした。普通 *native language* と言えば母語、第一言語のことだが、Tolkien はこれを “native linguistic potential” と言い “preferences in the individual for certain phonetic elements or combinations ... reflecting an individual’s innate linguistic taste” と説明している<sup>13</sup>。Tolkien がここで複数形を使っていることから分かるように、個人的な言語的嗜好は移り変わるものだと、自分もラテン語、ギリシア語、スペイン語、ゴート語、フィンランド語、そして British-Welsh (中世ウェールズ語、さらにブリトン語という祖先が内包されているという意味でのウェールズ語) という決定的な *native language* に辿り着いたのだと言う。

Tolkien は一方で自らの *native language* は、個人的なレベルだけではなく集団に共有されるレベルがあると考えていた。かつてブリテン島のほぼ全域が British の言語圏でありその言語文化を共有していたという歴史を考えた時、ブリテン島に住む人々にとって British の末裔である現代ウェールズ語は、言語的心性の琴線に触れ、奥深く眠っている British という *native language* を呼び覚ましてくれる。ブリテン島に住む人々はいまだに深層部ではブリトン人(British)なのであり、その言語(British)とその後裔であるウェールズ語を通して、そこへと帰郷できるのだと主張する<sup>14</sup>。『指輪物語』の中の人名や地名は、ウェールズ語の音韻体系のパターンを意図的にモデルとした Sindarin というエルフ語で作られている。この帰郷願望を探求しようとしたのが『指輪物語』であると位置づけているのである<sup>15</sup>。

## Tolkien にとっての Celtic なるもの

ウェールズ語は、ブリテン島の基層言語である British から一連の音韻変化を経て派生したものである。Tolkien はこれと同じ音韻変化の過程をエルフ語の祖語である Common Eldarin から Sindarin への変化に当てはめている。Common Eldarin から派生したエルフ語は Quenya, Telerin, Noldorin, Ilkorin, Danian と枝分かれし、1940年頃のメモにも見られるように、Tolkien はそれぞれの関係性に依りて音韻変化を検討している<sup>16</sup>。このメモの時点ではまだ Sindarin の名前がないが、Tolkien はエルフ語間の関係性も常に改訂し続け、1951年には『指輪物語』に合わせて、それまで何十年にも亘って作り上げてきたエルフ語の歴史に大規模な改変を行い、Sindarin をすべての Middle-earth のエルフが話す言葉と位置づけた。これは、Middle-earth における Sindarin に、ブリテンにおける British-Welsh (かつてブリテン全域で話されていた言葉であり、ブリテンの基層言語) に呼応する性格を付与したわけである。

Tolkien にとっての「ケルト」とは何かと考えた時、それはブリテンの土壌で齢を重ねた基層言語としての British-Welsh という、彼が言うところの *native language* であり、それを彼の作品世界(the Secondary World)で映し出している Sindarin というエルフ語だと言えよう。

<sup>1</sup> 講演は後にエッセイとして出版されている。J. R. R. Tolkien, “English and Welsh” in Christopher Tolkien ed., *The Monsters and the Critics and Other Essays* (London: George Allen & Unwin, 1983) pp. 162-97.

<sup>2</sup> Simon James, *The Atlantic Celts: Ancient People or Modern Invention?* (London: British Museum Press, 1999); John Collis, *The Celts: Origins, Myths & Inventions* (2003; Stroud: Tempus, 2006); Gillian Carr and Simon Stoddart ed., *Celts from Antiquity* (Cambridge: Antiquity Publications, 2002).

<sup>3</sup> Patrick Sims-Williams, “The Visionary Celt: The Construction of an Ethnic Preconception”, *Cambridge Medieval Celtic Studies* 11 (1986), pp. 71-96.

<sup>4</sup> Joep Leerssen, “Celticism,” in Terence Brown ed., *Celticism* (Amsterdam-Atlanta: Rodopi, 1996), pp. 1-20.

<sup>5</sup> Kenneth Hurlstone Jackson, *A Celtic Miscellany: Translations from the Celtic Literature* (London: Penguin Books, 1951, rev. ed. 1971), pp. 18-19.

<sup>6</sup> *Monsters and the Critics*, p. 172.

<sup>7</sup> 池上俊一「ヨーロッパ中世の驚異譚における空間と時間」、山中由里子編『<驚異>の文化史 中東とヨーロッパを中心に』名古屋大学出版会、pp. 203-04.

<sup>8</sup> G. L. Kittredge, “Sir Orfeo”, *American Journal of Philology* (1886) ii, pp. 192-97.

<sup>9</sup> W. B. Yeats, *Writing on Irish Folklore, Legend and Myth*, ed. by Roger Welsh (1897; London: Penguin Books, 1993); Dimitra Fimi, “Mad Elves” and “Elusive Beauty”: Some Celtic Strands of Tolkien’s Mythology”, *Folklore*, (2006) 117:3, pp. 156-70; Mark Williams, *Ireland Immortals: A History of the Gods of Irish Myth* (Princeton: Princeton University Press, 2016), pp. 475-77.

<sup>10</sup> *Monsters and the Critics*, p. 189.

<sup>11</sup> Yoko Hemmi, “Tolkien’s *The Lord of the Rings* and His Concept of *Native Language*: Sindarin and British-Welsh”, *Tolkien Studies*, VII (2010), pp. 147-174.

<sup>12</sup> *Monsters and the Critics*, p. 190.

<sup>13</sup> Humphrey Carpenter ed., *Letters of J. R. R. Tolkien* (London: George Allen & Unwin, 1981), p. 375.

<sup>14</sup> *Monsters and the Critics*, p. 194.

<sup>15</sup> *Monsters and the Critics*, p. 197, n. 33.

<sup>16</sup> Marquette University Libraries, Milwaukee, Tolkien Mss-3/1/32, fol. 10v, in Carl Hostetter, “Inventing Elvish”, in Catherine McIlwaine, *Tolkien: Maker of Middle-earth* (Oxford: Bodleian Library, 2019), p. 46.